仰せられ、「弘法は智者なるが故に一を三と讀み、日蓮は愚者なるが故に一を一と讀む。」等の切實なる多くの御遺文を拜すれば如實に祖師の御意を竊ふことが出來る。この純眞なる精神の全要求に對して與へられたのが法華經であり、從つて此の法華經に說示されたる敎へこそ人生最高の原理であり、最も完全なる生命の源泉であらねばならぬ。而も本化の佛使日蓮上人のこの先人未踏の法華經の行者として一天四海皆歸妙法の大旆を揭げ攝受折伏、時に應じて一期を妙法の弘通に捧げ、權威ある宗敎を末法の社會に徹頭徹尾行き渡らしめんとの六十年の生涯猶足らざるの御精進を偲び奉る時、誰かその尊さに感激せざるものがあろふか。「鳥と虫とは鳴けども涙落ちず日蓮は泣かねども涙ひまなし」と或は「日蓮は日本六十六ヶ國島二つの內五尺に足らざる身の一つ置く所なし」等の御遺文は一讀よく上人の全生活を伺ふに足る。警鐘は旣に亂打された。吾々は常に一切の偏見を捨てゝ、純なる魂と溢るゝ熱情とに依つて眞摯なる一道を辿り、宗祖の所謂、二陣三陣の「和黨」として努力精進以て向上の一路に、滿進すべきである。

哲學的部門より觀たる台、當兩家

黑崎政信

（A）序　言

宗教は信仰を以て、其本領となすものなるを以て、多分に情的分子を含むことは言を俟たざる所である。故に世の進化に逆ひ、保守的傾向を有するは免るべからざる所なりと雖も、而も亦、智識に於いて、全然否定する所に向つて、それが信仰を立てる事の不可能なるは勿論である。

茲に於いて、最も發達せる宗教は「學の學」たる哲學の上にその基礎を有し之に依つて其の信念を鞏固ならしむるものでなければならぬ。卽ち、絕對平等不可思議なる、宇宙の大實在を究明するを以て其の第一義となし（平段）之を有限なる吾人の意識内に反映し來ると同時に、有限化して人格的實在を現出し、之を標準とし、之を對象として、敬仰し憧憬し、漸次改善、進化するを以つて第二義的（目的）とせねばならぬ。

而して、此の兩義を完備して始めて眞の宗教と云ふべく、社會救濟の實、はじめて具はるのである。若し、茲にそれが第一義を缺く宗教ありとすれば、是れ畢竟、迷信的邪教にして、晃々たる科學の光明に遭へば、哀れ邯鄲の夢醒め果てゝ、果敢なき最後を見ねばならぬのである。

現在、宗教と稱するもの、その數夥しきも、而も、一佛教を除くの外、皆唯、天啓、暗示等に依りて成れるもの多く、深遠なる哲理の上に立てるもの、殆んど之を見出し得ないのである。故に輓近科

學の鐵槌に接して多くの宗教の牙城は、累卵の危きに頻して居る有樣である。

然るに、佛教は大覺世尊の幽玄なる知見に依つて立教し、古今一切の哲學說を綱羅し、凡ゆる科學を含蓄して、尙ほ餘裕ある基礎を有するを以て、如何程研鑽し、討究すると雖も、動かざること盤石の如く、佛日の光輝は、將た愈々顯揚されんとしてゐるのである。

而して、玆にそれが第二義を缺く宗教ありとすれば、それは、但、一片の哲學として許される事はとまれ、吾人は宗教として、その價値を認むる事は不可能であると思ふ。縱令、それが說く所、如何に巧妙にして一點の間然する所なく、善く宇宙の本理を究明すると雖も、之を人格化して、信仰の對象とする事なくしては偉大なる感化を與へて、一切人類を指導する事は到底不可能であるからである。然り、唯、不可思議なる絕對的實在を捉へ來つて、之を目的とし、之を標準とし、之に依つて安心立命すべしと說くとも、要するに、これ無味乾燥の空論に止まるのである。

玆を以つて、凡ゆる宗教は一として、人格的實在を立てざるものとてはなく、その人格的實在の明瞭であればあるだけ、感化力の大なる事を意味するものである。

之を要するに、眞の宗教は、先づ理性に滿足を與へ、而して後、感情に對して確たる慰安を得せしむるものでなければならぬ。而して、吾人は玆に全佛教の巨擘とも云ふべき、台當兩家の宗教的眞價

の何れが勝れるかにつき、聊か研究せる所を述べてみやう。

（B）台家の哲學的部門

法華經所詮の極理は、正に諸法實相である、而して、台家は法華經を主依となすと雖も、而も迹門を以て、それが表となすが故に其の世界觀は、一如的實在論にして、隨つて全法界を以て、一法性の顯現と見るのである。故に、善惡邪正、生死涅槃共に、一法性の上に起る作用に外ならずと說くのである。則ち、天地の形相に必ず性あり、性ある所必ず復た体あり、而して性体のある所必ず力、作、因、緣、果、報是に依つて現はるのである。而も報を享けたる所、その儘、相なるを以て、本末究竟して平等である、（約假諦）隨つて、十界の依正は、皆悉く此の因果の一大理法に依つて經緯さるべきものである。

故に、十如は十界の通体、十界は十如の別相となる、而して、十如の基本は力作にあらず、因緣にあらず、又、果報にもあらずして、相性体の中にあつては卽ち性である。故に、十界各々其性を本として展轉反覆し、一は善の輪を造りて佛と顯はれ、一は惡の輪を作つて衆生と現じ、兩者の間隔は實に天壤も啻ならざるが如く見ゆれども、而も、畢竟する所、共に是れ一大法性の顯現の左右に外ならんのであると云ふ。

是を以て、十界三千の諸法は、全く唯一心の發動と見るべく、則ち一念、僅かに動けば三千爰に忽然として現はれるのである、卽ちこれ一念三千である。

斯の如くにして、全法界迷悟の諸法を以て、一法性の顯現となし、再轉して是を一心に攝するのであると說くのである。而して、空假中の三諦論に至つては、空中に假と中とあれば斷無の空にあらず、假中に空と中とを現ずれば、賴緣の假にあらず、中は固より、空假を收むれば無得の中にあらず、假より見れば一切假、空より見れば一切空、中は假空を統合すれば、中の外に假空なく、擧一卽三、非前後、含生本具、非造非作也と。

されば、台家の宇宙觀は、一實眞如を以て絕待平等、不可思議なる實在ありとなし、是を示すに三諦論を以てしてゐるのである。之れ實に、一元論の究竟、一大圓宗の性具論にして、正に天地法界の眞理を叩いて遺感なきていの感がある。而して、台家は此法性の一如を以て、妙法蓮華經の正体としてゐる。故に、天地は妙法に收まり、妙法は天地を發顯するのであり、地獄乃至九界の業因業果も亦、妙法の顯現と見るのである。

茲を以て「十如十界の諸法は今經の正体なるのみ」と論斷する事が出來るのである。以て、台家の法華經觀の大意を知るべきである。卽ち、直ちに宇宙の現象を捉へず、之を顯現する根本實在を以て

眞如と號し、蓮華と名づけてゐるのである。故に、台家に於ては、現象卽實在に非ずして、實在卽現象であり、事に由ての理ではなく、理に由ての事である。卽ち、台家の本領が所謂、理事無碍なれども、その主とする所、理にあるは多辯を要せざる事實である。故に、諸法の妙を論ずる場合、必ず、先づ之を法位に住せしめねばならぬ。何となれば、宇宙の玄妙は、唯、靜的理体にのみ存するからである。

然し、此の台家の所論、果して全く遺漏なきか?、又、末法今時に於いて、之を基礎とせる宗敎が、果して大なる感化を與へて、宗敎本來の使命を完全に果し得るか、否か?、

吾人は以下、當家の哲學的方面を論述して、兩者の批判を試み、以て、其の宗敎としての眞價を論ぜんとするものである。

(C) 當家の哲學的部門

當家も亦、法華經を以て主張としてゐる事は天台と同樣なれども、而も諸法の實相を明すに、台家の如く迹門を表とせずして、本門壽量の見地に立て之を論じてゐる。卽ち、悠久なる無始却來、無際、無限に活動しつゝある現衆を促へて、その上に眞理を見出すのである。而も、台家に於いては、その事相の內面に一念三千を具するが故に、外に事の活動生ずるのであると論ずるのであるが、當家に至

ては、活動の當相、卽ち變轉極まりなき、天地法界の萬象を以て、直ちに宇宙の本体を論じ、之をその儘、觀取し來て、以て、本佛釋尊の化身なり、色身なりと見るのである、されば壽量品の

「我實成佛以來無量無邊云云」

の文を吾祖御義に釋して

「我トハ法界ノ衆生ナリ、十界各々ヲ指シテ我ト言ナリ、實トハ無作三身ノ佛ナリト定メタリ、此ヲ實ト云フナリ、成トハ能成所成ナリ、成ハ開ノ義ナリ、法界無作三身ノ佛也ト開ケタリ、佛トハ之ヲ覺知スルヲ云フナリ、己トハ過去ナリ、來トハ未來也、已來ノ言中ニ現在ハ在ルナリ、我實ト成佛ニシテ、已モ來モ無邊ナリ、無量ナリ云々」

又、同品に　「如來如實知見、三界之相、無有生死、若退若出、亦無在世、及滅度者、非實非虛、非如非異、不如三界、見於三界、如斯之事、如來明見、無有錯謬云々」

等と、又御義に之を釋して「如來トハ三界ノ衆生ナリ、此衆生、壽量品ノ眼開キ見レバ、十界本有ト實ノ如ク知見セリ、三界ノ相トハ生老病死ナリ、本有ノ生死ト見レバ無有生死ナリ、生死ナケレバ退出モナシ、唯、生死無ニ非ルナリ、生死ヲ見テ、遠離スルヲ迷ト云ヒ、始覺ト云フナリ、サテ本有ノ生死ヲ知見スルヲ本覺トハ云フ也云々」

と云ふに見ても、台當其意を異にせるを知るべきである。

之を要するに當家の宇宙觀は、靜止的理体を本位として、天地の万有は之より顯現すると云ふが如きものに非ずして、理は此の活動せる事象に、本有的に具備せる靈力にして、事を離れて、別に理を認め得ず、事の一切は卽ち理の一切なるを以て、事理全く不二と見るのである。

されば、理性より事象が顯現せるに非ずして、理性は事象の屬性と見るのである。換言すれば、理性は事象中より抽出し得たる觀念に過ぎないと見るのである。故に當家より見れば台家の法性なるものは、大宇宙の妙色中に含蓄せらるべき性質のものである。

之を以て、宇宙の本体と論じ、蓮華と稱へ、十界の事相は之より顯現し、生起するとすれば、所謂プラトンの「一切万有は、恍惚夢の如きイデアの世界より墮落し來つたものにして、法界は畢竟イデアの世界の蔭影に過ぎず」と論ずる觀念論と何の擇ぶ所がないのである。又、道家の虛無說にも類似して居り、彼の歐州中世の哲學とも、同一視し了せるのである。若し、此の說に從はんとすれば、無より有を生じたりてふ、本無今有の論談にも首肯せざるを得ぬし、又、性より相を出すとすれば、相は性の一部分と見なければならぬ。果して然らば、修德は性德の全部を具備すると云ふことは、何を根據として之を論ずるか、吾人は大なる疑問を持たずには、之を見る事は出來ないのである。例せば空

より落下せる、一個の隕石を捉へて、天体の性質悉く之に備はれりと云ふが如き、奇論に到達せねば止まぬ事と思ふ。

蒼空高く、散りばめられた、彼の億千の星辰にさへ、尚ほ、依然として吾人の解し得べからざる、解することを許されぬ、幾多の秘密が伏在してゐる、然らば、森嚴たる万有は、眞如の一理より顯現せりてふ前提をあげて、直ちに全性起修を論じ、十界互具、一念三千を決論せんとする事は、固より周到せる議論と云ふ事は不可能である。卽ち、一如的實在論は、末だ以て經王法華經の眞義を論盡せざるのみか、寧ろ華嚴の二元論と同ずるものにあらざるなきか、

斯く論じ來れば、悠々たる宇宙は、實在より派生したる假現にあらずして、花笑ひ、鳥歌ふの當体、卽、是れ實相にして平等不可思義の妙趣となり、峨々たる山嶽、洋々たる蒼海も皆悉く常寂光土となるのである、是を離れて別に本体なく、十界は卽眞理となるのである。提婆品に

「觀三千大千世界、乃至無有如芥子許、非是菩薩捨身命處、」

と、是れ宇宙間の一草一木、一礫一塵悉く佛陀の原子なりと說いて、遺漏なきものである。故に、觀心本尊鈔に(九三九)此の意を述べて

「妙覺ノ釋尊我等カ骨肉ナリ、因果ノ功德骨髓ニアラズヤ云々」

と、卽ち、當家の哲理は實に「十界事常住」にあり、宇宙万象を以て、直ちに無始久遠の佛陀と見、十界は本來同体と見るのである。

（D）結　論

要するに、台家に於いては、其の主張する所、實に迹面本裏にして、湛然たる實相の一理を以て、法華經の体となし、諸經の契合とし、又、諸法の本体と見るのである。されば、玄義第九に（三八B）

「第七ニ徧ク一切法ノ体トナルトハ、觀經ニ云ク、毘盧遮那一切處ニ徧スト、初メノ文ハ法身ヲ指シテ經ノ正体、諸經ノ所依トナス乃至淨名ニ曰ク無住ノ本ヨリ一切ノ法ヲ立ツ、此謂乎、然ルニ所依ノ体ハ体妙ニシテ異無シ、能依ノ法ハ法ニ麁妙アリ」

と、乃ち、台家に於ては、正しく宇宙の太源を以て、無相の極理とみなすのであつて、所謂、有佛無佛性相常然たる、三身卽一の法身が万有の奥底に潛在し、玆に、本有的に染淨の二法を具備して自ら顯現し、これが修善修惡となり、森嚴たる三千の諸法を展開すると見るのである。故に、是法住法位世間相常住の文は、實に台家宇宙論の眞髓にして、縱令、當体全是の「具」字を以て、修性不離を主張するとは云へ、現象を以て假現視し、實在を以て湛然不動と觀じて、實在の一面に特に力を入れし傾向あるを見逃すことは出來ないのである。故に台家の主張は卽ち、現象卽實在論に非ずして、實在

卽現象論と云ふべきである。

當家に於ては、實に本面迹裏にして、一部唯本を主張し、壽量秘沈の無作三身を以て、一經の正体となし、又、天月と觀じ、軈て又万有の色相そのものと見るのである。されば觀心本尊抄に(九三九)

「今本地ノ娑婆世界ハ三災ヲ離レ四劫ヲ出デタル常住ノ淨土ナリ、佛既ニ過去ニモ滅セズ未來ニモ生ゼズ所化以テ同体ナリ、此卽已心ノ三千具足三種ノ世間ナリ」

と、天地を以て一体となし、無始活動の現象を捉へて、直ちに實相と明し、常住と談じ、本体は事々物々の上に在ると見るのである。卽ち、台家の如く靜止的理体を以て宇宙の實相とするに非ずして、寧ろ、斯の如きものは、事象より抽出して得たる概念に過ずして、無幻虛無と云はねばならぬものであると見る。

何となれば、實在は性にあらずして寧ろ相でなければならないからである。されば、台家が假現と考へたる修德は、茲に本有の實在となつて、帝王乞食も、黃鸝も不修不繕宛然として、無作三身の尊形となるのである。故に彼は實在卽現象論、此は現象卽實在論、彼は理融通、此は事融通、彼は十界互具、此は十界同体、彼は迹門の一念三千、此は本門の一念三千であるのである、故に日蓮聖人は、

「一念三千ノ觀法ニ二ツアリ、一ハ理二ハ事ナリ、天台傳敎ノ御時ニハ理ナリ、今ハ事ナリ、觀念既

ニ勝ル故ニ大難色マサル、彼ハ迹門ノ一念三千、此ハ本門ノ一念三千ナリ、天地遙ニ異ル也」と、以て、台當兩家の異目、勝劣等を知るべきである、されば、理性を以て實とし、事相を以て、權となし、全性起修を附會して、强いて十界互具を說かんとする台家の哲學は、竟に、當家事觀の簡明直截にして、而も、能く事理の奧底を論盡せるに及ばざる事、甚だ遠いのである。

以上、略して台當兩家の哲學的方面に就て、之を批論せしと雖も、吾人は、唯、理の徹底せる事のみに滿足を抱くものではないのである。

然らば、其目的、卽ち、實際的方面救濟としての宗教の眞價、果して如何か、吾人は更に之に就いて論述せんとはすれ、紙數の許さゞる所、隨つて、次回に於いて之を論ぜんとするものである、幸ひに之を諒せよ。

（昭和五年仲秋　伊豆　錦玉精舍にて）

生活戰線と宗教問題

津田歡貞

最近の世相を展望するに、「大東京失業者四十萬を突破す、全國失業者無慮百萬に及ばんとす云々」